



サケマス母船群で賑う函館港（函館山より）

地方だより

☆ 函館海洋气象台 ☆

青森を出た連絡船が津軽海峡の中ばを過ぎると、行手遙かに北海道の山々が淡く青く水平線上に浮んで来る。船の北上と共にこの山々は次第に濃く且つ高くなって、北海道の南端が視野に大きく拡がって来る頃には、中にひととき輪郭も鮮かに孤立した山が、その岬々とした絶壁を以って旅客の眼を引くに至る。これが函館の象徴、新日本百景第一位の函館山で、船はその麓を迂廻して北海道の玄関口函館棧橋に接着する。

北海道の海の玄関函館はまた、高田屋嘉兵衛の千島交易以来広大な北洋に於ける日本人の海洋活動の門戸でもあって、この地に明治5年本邦最初の測候所が誕生したのも、またそれが後に（昭和17年）神戸に続く第2番目の海洋气象台に昇格したのも必然の結果といえよう。

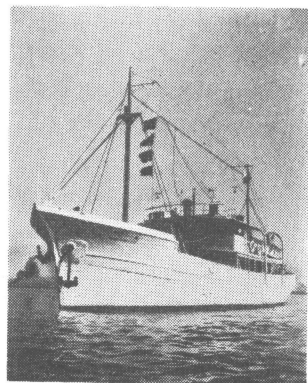
函館海洋气象台は現在、総務・海洋・海上気象・予報・測候の5課より成り、本館は市の郊外赤川の野にあって、予報課は市内の分室で予報サービスを行っている。

当海洋气象台の予報課は、地方气象台と同様に担当の府県予報区に対する日々の天気予報を出す仕事の外に、

広大な地方海上予報区を担当して、春夏のサケマス漁、夏秋のイカ漁、秋冬のサンマとタラ漁等々の夥しい数の漁船を激しい北の気象から守る海上予報を其の重要な使命としている。毎年、20隻に近い大型母船と約600隻の独航船が一齊に北洋のサケマス漁場目差して出港する

（写真参照）5月上旬は函館全市が沸き立つ時であるが、予報関係者もまた一番張合を感じる季節でもある。

海洋气象台の花形、海洋課は150吨の夕汐丸を駆って年に4回定期的に、オホーツク海及び三陸沖の海洋観測を実施して、気象庁の凌風丸及び神戸海洋气象台の春風丸との一貫した海洋調査の一翼の責任を果すと共に親潮の構造と消長、並びにその根源の探究に努めている。



海洋観測船 夕汐丸

当台の特色ある今一つの仕事にオホーツク海の海水観測がある。即ち海上気象課では、札幌管区气象台及び網走地方气象台との協力の下に、昨年より飛行機による海水観測を実施しており、独自の写真測量法を駆使することによって広範囲に渡る流水の分布と漂流状況を捕え、これ迄不明に近かったオホーツク海南西部の流水の構造と流路を明らかにすることができた。北の海での、今一つの重要な海上気象現象である海霧についても、当台の夕汐丸の外に多数の巡視船、自衛隊等の協力を得て今夏広汎な観測の緒に着いたところであるが、それについては又別の機会に紹介することにしよう。（原文のまま）

（渡辺貫太郎 記）



知床半島附近を飛ぶ流水観測機